

山友会 白書 2025

認定特定非営利活動法人 山友会
2025年度活動報告書





p4 代表挨拶

p5 理事長挨拶

p6 特集：
第二次中期事業戦略の
振り返りとこれから

p10 活動報告 1：
クリニック

p12 活動報告 2：
相談室

p14 活動報告 3：
炊き出し・アウトリーチ

p16 活動報告 4：
食堂

p18 活動報告 5：
山友荘

p20 活動報告 6：
居場所・生きがいづくり
プロジェクト

p22 活動報告 7：
山谷・アート・プロジェクト

p24 活動報告 8：
共同墓地の運営

p26 活動報告 9：
社会的包摂を推進する
ための普及・啓発事業

p28 会計報告

p30 ご支援について

山友会白書 2025

2026年6月発行

発行者：特定非営利活動法人 山友会

デザイン・イラスト：進士 遙

協力：ボランティアの皆さま、関係者の皆さま

Special Thanks：山友会の仲間たち

代表
挨拶

ルボ・ジャン



コロナ禍を経て、山友会は少しずつ元の姿を取り戻しています。この数年間は、私たちにとっても辛く、苦難の時期でした。活動の制限や人と人との距離を保たなければならない状況の中で、これまで当たり前にあったつながりが失われていきました。

昔、山谷のおじさんたちは、私たちにとっての人生の先輩として、毎日のように山友会に来てくれて、いろいろな手伝いをしながら、楽しかった思い出や悲しかった思い出を語り合っていました。そうした時間が、山友会の歩みを支えてきたのだと思います。今でも、あの頃のように人と人が顔を合わせ、言葉を交わし、同じ時間を過ごすことを大切にしていきたいと思っています。

しかし現在、山谷地域では大きな変化が起きている。再開発が進み、記録的な速さで高層ビルが建ち並び、町の至る所で工事が行われています。路上生活を送る人たちはどこにいればよいのでしょうか。どこで過ごせばよいのでしょうか。町にはたくさんの方が住

めるマンションが増えているのに、彼らが寝泊まりできる場所も、座って体を休めたり語らい合ったりできる場所も、少しずつなくなっています。

気を付けなければ、路上生活を送る人たちは、第二次世界大戦中のユダヤ人のように迫害されてしまう存在になりかねません。彼らは、路上生活者としてこの世に生まれてきたわけではなく、路上生活者になりたくて育ってきたわけでもありません。一人ひとりにそれぞれの人生や事情があり、今の状況に至っています。開発や時代の変化の中で、同じ人間であるという当たり前のことを忘れてしまった時に、私たちは大切なものを見失ってしまいます。

振り返れば、山友会は長年、おじさんたちの存在を身近に感じながら、楽しい時期も辛い時期もともに乗り越えてきました。その中で生まれた深い絆は、何より大切なものです。これまで積み重なってきた思い出と絆を、これからも大切にできる場所であり続けたいと思っています。

理事長
挨拶

大脇
甲哉



皆様からのご支援のおかげで、山友会は40年を超える活動を続けることができました。あらためて厚く感謝申し上げます。

近年の社会状況の変化に伴い、私たちの支援対象にも変化が見られます。路上生活者・日雇い労働者数の減少傾向が続く一方で、住居があるにもかかわらず生活が困窮し、相談するところもなく孤立した状態で山友会に連絡される方も目立つようになりました。

山友会は長年、貧困・孤独・孤立の問題に向き合ってきました。支援対象が変化していく中でも、「おじさん達」と関わり続ける上で大切にしてきたことがあります。それは、集まりやすく、相談しやすい「場」をつくり、その場があることで、お互いの信頼関係を築き、その関係の上で活動していくことです。

我々の活動内容は、寄り添いを続ける、見守る、必要な場合は付き添って手助けする、看取る、このように、支援対象者の人生に寄り添い続けることを理想としています。

以前は路上生活を送る方が多く、無料診療や炊き出し、生活保護の申請など、命をつなぐた

めの支援を行うだけで精一杯でした。病院受診や生活保護申請などの手続きの際に、一人では自分の状況をうまく説明できない人や、医療者などからの説明が理解できない人もいます。手続きには時間がかかり、長いときには半日以上かかることもあります。そのため、緊張や不安に耐えられなくなり、途中であきらめてしまう人も少なくありませんでした。

現在では、こうした必要に応えるために、経験を積んだスタッフが付き添い、本人が納得できるようにわかりやすく説明するなどの支援を行っています。

2015年に同じ山谷地域にある寺院の光照院に共同墓地を建て、活動を通して関わりのあった方で希望された方のご遺骨をお納めできるようになってからは、死後も誰かが覚えていてくれ、つながりが続いていくという安心感につながり、おじさん達に非常に喜ばれました。

山友会は今後も支援対象者の人生に最後まで寄り添う活動を続けてまいります。皆様の末長いご支援を何卒よろしくお願い申し上げます。

特集

第二次中期事業戦略の 振り返りとこれから



「山友会らしさ」が戻りつつある

第二次中期事業戦略（2022年度～2025年度）では、「新型コロナウイルス感染拡大によって失われたつながりや居場所を取り戻すこと」が目標の一つでした。食堂での昼食提供は段階的に再開され、利用者数は2023年度の691人から、2025年度には4922人へと大きく増加。居場所・生きがいづくりプロジェクトや山谷・アート・プロジェクトなど、つながりと居場所をつくる取り組みも本格的に再開され、人が集い、再び賑わいを感じられるようになってきています。

そうした中で、「久しぶりに来たよ」と言って立ち寄ってくれるおじさんの姿も見られるようになりました。何年も顔を見せていなかった人が、ふらっと訪れることができるのは、山友会らしさをよく表しています。



町の変化の影で

一方で、マンション建設の増加や山谷地域周辺で商業施設の建設が計画されているなど、再開発は加速しており、地価も上昇しています。その影響で、生活保護基準内で入居可能な賃貸物件はごく限られています。さらに、それまで身寄りのない生活保護受給者などの住まいの受け皿となってきた簡易宿泊所も、建物の老朽化の影響などにより減少しています。

この変化の中で、居場所・生きがいづくりプロジェクトで「まちづくりについて考えるミーティング」が続けられていることは、おじさん達のように、ともすれば開発の中で取り残されやすい、簡易宿泊所や生活支援施設で暮らし続けてきた方たちが、自分たちの暮らす町に主体的に関わっていくことにつながっていると捉えられます。町の変化を自分ごととして捉え、自分たちにとって、また同じような境遇にある人たちにとって、よりよい地域にしていこうとする思いが生まれる可能性を持った取り組みです。





支援の現場に起きている変化

支援の現場でも、この数年で変化が起きています。相談室での相談・支援件数は2023年度の8,125件から2025年度には9,257件へと増加。高齢化した「山谷のおじさん達」のような従来からの支援対象者の見守りニーズの高まりを反映する一方で、新規相談者の中では40代・50代の比較的若い世代や、精神疾患・障害を抱えた方、外国人、女性など、その背景が多様化してきています。



加えて、コロナ禍以降、地域外からの電話やメールによる相談が増えているほか、就労による自立を希望し生活保護制度や自立支援センターの利用を望まないケースや、難民認定申請中のホームレス状態にある外国人のケースなど、公的支援制度につなぎづらい相談も目立つようになっています。

こうした新たな相談者の方々が継続的に来所することは少なく、これまでのように来所を前提とした方法では、関係性を築いていくことや、支援対象者同士の互助関係を育んでいくことが難しいという課題が見えてきました。

これらのことから、従来の支援対象者への支援を中心としつつも、多様な背景を持った新たな相談者が重なり合う、支援対象の二層化が進んでいる状況と言えます。物価上昇などの影響も踏まえると、この傾向は今後も進んでいく可能性があり、これまでの山友会の支援の仕組みだけでは対応が難しくなっていくと考えられます。



これからに向けて

ここまで触れてきたように、支援制度につながりにくい相談者への支援や、継続的な来所のない支援対象者との関係構築、医療ニーズの変化など、山谷地域や支援対象者の変化に対応していくことが求められています。

この状況を受けて、山友会クリニックや緊急一時宿泊、アウトリーチなど、これまでの支援の仕組みでは対応が難しくなっている活動や、当初の対象や方法を超えて幅広いニーズに対応してきた事業について、その役割や意義を改めて整理し、現状に即した形での支援のあり方を検討していくことを考えています。

また、このためには、必要な人材を確保できていない状況が続いている山友荘や相談室の人員体制の建て直しが急務です。そして、再開発の進行や低所得者向け住宅の減少といった状況において、住まいや居場所を確保していくことも引き続き重要な課題であり、地域の変化による摩擦も考えられる中で活動を続けるための用地確保もいずれ必要となるでしょう。

一方で、このような変化の中にあっても、生活に困窮し、孤独を深めた人々と共に生き、そうした人々にとって頼れる場所であり続けるという山友会の理念の重要性は、むしろ高まっていると感じています。40余年の歩みの中で関わってきた多くの人にとって、「変わらずにある場所」の存在は大きな支えとなります。

支援の形は変わっていくとしても、「山谷のおじさん達」と築き上げ、大切にしてきたことは変わりません。変化に対応していくことと、変わらずにあり続けることの両方を引き受けながら、これからの取り組みを進めていきたいと考えています。

(副代表 油井)

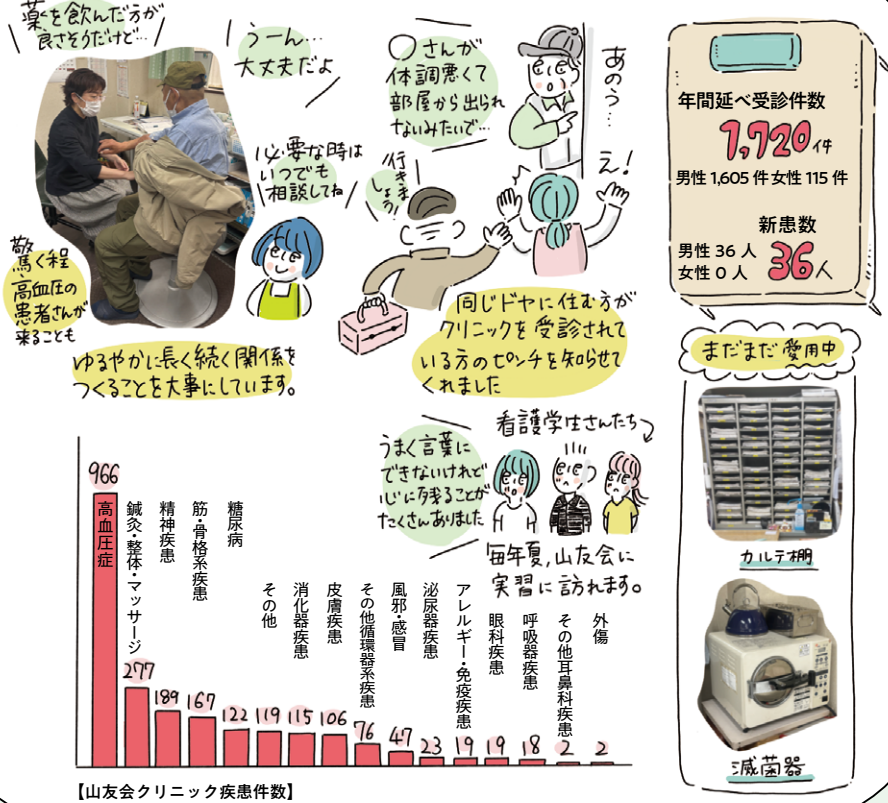
活動報告

クリニック

1

ボランティアの医療従事者と職員の看護師が、主に路上生活者など健康保険証を持たない方に対して、無料診療を行っています。より専門的な治療が必要な場合には、治療を受ける上で必要な公的支援制度の利用ができるよう相談室と連携しながら活動しています。

▼ 2025 年度山友会クリニック 活動実績



1 年を振り返って

山友会を利用される方のご高齢ですが、介護や医療サービスを利用しながら地域での生活を続けています。以前と比べると、病気などを抱えながらも地域で過ごすための選択肢が増え、最期まで住み慣れた場所で生活する方が多くなっています。

住み慣れた場所で生活を続けられることは、ご本人にとって「安心」につながります。しかし一方で、「どこまで治療を受けるか」「最期はどこで、どのように過ごすか」といった重要なことをご自身で考え、決めなければならない場面も増えています。山谷で暮らす方の多くはひとり暮らしで、ご家族とも長い間会っていない方がほとんどです。大事なことを決めるときに、そばで一緒に考えてくれる人がいない。そうした方が増えていくと感じています。

毎日山友会に顔を出す 70 代の A さんは、炊き出しの準備などを手伝ってくださる、みんなから頼りにされる存在です。その A さんがいる日、突然左目が閉じてしまい、物が二重に見えるという訴えてクリニックにきました。食欲もなく、脳の疾患を心配して病院へ救急搬送されました。検査で異常は見つかりませんでしたが、症状は改善せず、買い物に出ることも難しい状態が続きました。そのため、症状が改善する間だけでも訪問介護の利

用を提案しましたが、「大丈夫だよ。なんとかなる」と、首を縦に振りませんでした。

その後も食欲の低下と吐き気、体重減少が続き、再び病院へ救急搬送され、入院となりました。退院後も顔色が悪くふらつきもみられましたが、介護サービスの利用は拒否されたため、ご本人の気持ちを尊重し、いつも山友会に来ておられるおじさん達やスタッフが買い物代わりに行き届けました。その後、数か月かけて目の症状は回復し、体重が戻るとともに顔色も明るくなりました。

A さんのように、「今まで自分でやってきたから」と、誰かの手を借りることに抵抗を感じる方は少なくありません。しかし身体が弱ってくると、誰かの助けが必要になります。ご本人が望む場所で安心して暮らし続けられるよう、必要なときに必要なサポートにつなぐことが求められます。

体調も信頼関係も、長い時間をかけて変化するものです。だからこそ、普段の何気ない会話や関わりを大切にしながら、おじさんたちを見守っていきたいと思います。小さな関わりの積み重ねが、いざというときに頼ってもらえる関係を育てていくと信じています。

皆さまのご支援に感謝しながら、これからも山谷で暮らす方々に寄り添い続けてまいります。

(クリニック看護師 天方)

山友会
おじさん語録

「俺の情報は、確かだよ」 - その情報はどこから？
「テレビだよ」 - なるほど。

活動
報告

相談室

2

生活上の問題や健康上の問題に対しての相談支援、ホームレス状態にあった方が、アパートやドヤ（簡易宿所）等での地域生活に移られた後の地域生活サポート（見守り、関係機関との連絡調整、緊急時対応等）を行っています。来所される方々に対してお茶や日用品も提供しており、山友会を訪れる人々にとっての憩いの場にもなっています。

▼ 2025 年度 相談室 活動実績

【相談・支援内容分類】



山友会の軒先自休が
まるごと相談室
ニニが一番
さっちゃんくよ



アクロイチで
来れたん
知れたん
後日所、今では
ほぼ毎日立ち寄
くれます。

1. 巡回回数	医師 24回 (精神科医 12回 整形外科医 12回)
	看護師 24回 (月2回)
	生活相談員 48回 (月4回)
2. 巡回相談実績	■延べ声掛け人数 580人 (巡回1回あたり24人)
	■対象者数 101人
	※姓名が確認できない対象者が重複して数えられている可能性あり うち、長期路上生活者54人、姓名または姓が名が把握できた人数85人
	■巡回時医療相談回数 347回 (巡回1回あたり14回)
3. 地域生活移行者	3人 内訳) 簡易宿所 3名
4. 見守り支援実績	生活相談等に至った人数 25人 (うち長期路上生活者22人)
	内訳) 生活相談 25人、山友会クリニックでの無料診療18人

【2025 年度 路上生活者巡回相談事業 事業実績】

山友会
おじさん語録

－これからの夢はありますか？
「夢？夢なんか見たことないよ」
－夜みる夢じゃないんだけど……何だか現実を突きつけられるような。

1 年を
振り返って

最近では、従来から関わりのある「おじさん達」の高齢化に伴う問題もありつつ、新たに相談に訪れる方の抱える問題も複雑化しています。現行の炊き出しやアウトリーチで声掛けをした方の対面での相談に加えて、電話やメールでの相談も増えてきています。また、他の支援団体や地域の関係機関から、宿泊先確保などの依頼もあります。

相談者の方も、路上生活の方だけでなく、40代から50代で不安定な仕事をしている人や、お住まいの地域で身近に相談相手がいない方など多様化しています。なかには、交通費がなくて山友会まで来られないという方もいます。

ある50歳の男性は長崎から上京し、「泊まる所と食べる物が欲しい」「“東京人”になりたい」と相談にいらっしゃいました。そして、「車の免許を持っているので、タクシー運転手の仕事がしたい」と希望していました。所持金がないので、仕事に就くまでの生活を安定させるために生活保護の申請を提案したところ、すぐに福祉事務所に相談に行くとのことで、バス代をお渡ししました。

その後、連絡がなかったため心配していたところ、3日後に「歩きすぎて足にまめができて痛い」とのことで再び来所されました。山友会クリニックの医師と一緒に改めて詳しく話を聞くと、統合失調症の既往と精神障害者保健福祉手帳を持って

いることがわかりました。

福祉事務所での相談では、生活保護制度の案内を受けるとともに、就労支援窓口を紹介され、地方での住み込みの仕事を勧められたとのことでしたが、東京で暮らしたいからと断ったようです。また、障害を理由に就職を断られてきた経緯があったこともわかりました。

そのため、クリニックの医師に診療情報提供書を作成してもらい、福祉事務所にもご本人の状態がわかるようにしました。福祉事務所では、相談室スタッフと一緒にご本人の気持ちや考えを伝え、無事に生活保護の申請を行うことができました。時間をかけて相談をすることで、ご本人は仕事をしたい一方で、日常的に誰かに相談できる環境を望んでいることがわかり、支援者が常駐している施設への入所が決まりました。

今後も、精神的な疾患や障害による生きづらさの中で、思いを伝えることが難しい方からの相談が多くなることが予想されます。相談員として、ご本人に寄り添いながら、その方に合うサポートと一緒に考えていくことが求められています。

(相談室 菌部)

炊き出し・
アウトリーチ

山友会では隅田川河川敷で、毎週水曜日にテント生活の方々を訪問するアウトリーチを行い、木曜日には炊き出しとアウトリーチを行っています。多くのボランティアの方々とともに、食事の提供だけでなく生活相談や健康状態の確認なども行っています。

1 年を 振り返って

皆様もお感じのように、世界情勢は国内物価に深刻な影響を及ぼし続けています。炊き出し・アウトリーチでは、年間の活動を通して、その影響がおじさん達をはじめ生活に困窮した方々の衣食住に大きな打撃を与えていることを痛感しました。

相談室では、路上生活には至っていないものの困窮状態にある方々からの食料支援の希望や、炊き出しに関する問い合わせが増加しましたが、炊き出しの現場でも、ここ数年で見かけるようになった若い世代や女性の姿が、目立って増えてきました。なかには、複数の区をまたいで遠方から来られるケースも少なくありません。活動の中で、ある路上生活者の方が漏らした「もうコンビニでおにぎりすら買えなくなった」という言葉は、現在の困窮の深さを象徴するものとして強く印象に残っています。

こうした変化のなかで、2020年度より開始した「上野アウトリーチ」を、2025年度の活動をもって一旦終了することといたしました。本活動は、コロナ禍で山友会の食堂を休止していた際、特に上野駅周辺で路上生活をされていた方々とお会いする機会が少なくなったことを受け、つながりを取り戻すことを目的に始まったものです。一定の成果を得て食堂も再開しましたが、活動を続ける

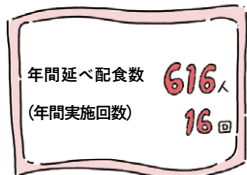
中で新たなニーズも浮き彫りとなりました。

上野駅周辺は、以前から路上生活を送る方の多い地域でしたが、新たに困窮状態に陥った方や、仕事が不安定でネットカフェやサウナ等を転々としながら生活する方など、従来の活動では接点を持つことが少なかった方たちの姿が見られるようになりました。こうした方々と出会うことができたことは、本活動の大きな成果といえます。しかしながら、スタッフの不足などにより、現在の体制では、こうした方々に必要となる支援を十分に行うことが難しく、また継続的な実施も困難となり、2025年度で終了する判断となりました。これまでの上野アウトリーチで見えてきた課題や、取り残されているニーズに対して今後どのように向き合っていくべきか、引き続き検討を重ねる必要があると感じています。

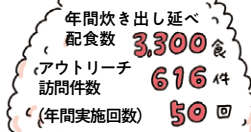
炊き出しやアウトリーチは、山友会の活動の根幹を成すものです。上野での活動は一区切りとなりますが、山谷周辺を中心に、一人ひとりとの出会いを大切にしながら、食料支援や健康状態の確認などを通して、生活に困窮された方たちとの信頼関係を築いていけるよう取り組んでまいります。

(炊き出し・アウトリーチ 金内)

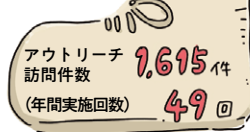
▼ 2025 年度
上野アウトリーチ 活動実績



▼ 2025 年度
木曜炊き出し・アウトリーチ
活動実績



▼ 2025 年度
水曜アウトリーチ
活動実績

山友会
おじさん語録

介護用品のレンタル業者さん「杖に名前を書いておけば間違えないですよね」やりとりを見ていた他のおじさん「その杖ごと置いてくるから意味ないよ」
-後日本当にそうなって、近隣のスーパーの人が届けてくれました。

1 年を 振り返って

2025年度の食堂は、前年同様に火、水、木曜日の週3回開くことができました。この一年の大きな出来事は、何といっても米不足でした。価格が高騰し、店の在庫が少なくなったため、お米が手に入らず大きな社会問題となりましたが、山友会もその問題に直面しました。お米は食堂にとっての「命」です。ご寄付の在庫が減り、心細くなるような状態が続きましたが、多くの皆様が緊急の呼びかけにに応じてくださり、年末までには再びたくさんのお米が寄せられ、ホッといたしました。この場を借りて、あらためて深く御礼申し上げます。

物価高が続く中、昨年度も寄付金とともに物品のご寄付に助けられました。畑で採れたほうれん草やサラダ菜、芋、人参など、柿やキウイもたくさんいただき、缶詰の果物と合わせて何度もフルーツポンチを作ることができました。また乾物や調味料、ホームページで募集している品など、必要に応じてくださる方々や、学校や教会、団体を通して寄付して下さった皆様に心より感謝しています。日々の食事作りが多くのご支援によって支えられていることを実感しています。

写真の銀杏は、山友会のお弁当を時々召し上がる女性が、お礼にと公園などで集めてきれいにしたものをお届けくださったもので、その数に驚き

ました。おかげ様でおじさんたちに晩秋の味覚を
味わっていただくことができました。ご寄付に
よって支えてくださる皆様と食堂があたかくつ
ながっていることを感じます。

食事作りにはボランティアさんたちが来てくだ
さり、ご協力をいただいています。どの曜
日も 12 時に皆さんに昼食を召し上がっていただ
けるよう、調理に励み、ご自分の時間を使って通
てくださる方々と、なごやかな雰囲気でお
じさんたちをお迎えできることを嬉しく思っ
ています。

おじさんたちは11時過ぎから集まり、食事申し込みの用紙に名前を記入して歓談しながら待ってられます。12時になると1度に8人ずつ食堂に入り、食べ終わると次の8人と入れ替わります。

初めて来た方が「久しぶりに食事らしい食事ができた、ありがとうございます」と感謝を伝えてくださり、また別の方は「今日食べた玉子丼はお母さんの味と同じだった、嬉しかった」と、キッチンまで来てお礼を言いに来てくださいました。「今日もありがとう!」、「ごちそうさま」というおじさんたちの言葉に元気をもらいながら、食堂を続けることができます。

(食堂 須山)

▼ 2025 年度 食堂 活動実績

クリニックの患者さんや相談室の相談者の方など、山友会を訪れた人々に無償で昼食の提供を行っています。一緒に食卓を囲うことで関係づくりのきっかけにもなっており、「心もお腹もいっぱいになる」食堂を目指しています。

山友会
おじさん語録

私は1日2食です。昼は2時ごろ、夕飯は4時ごろ。その後、8時ごろに夜食のラーメンを食べます。
- たぶん、それは1日3食ですかね……。

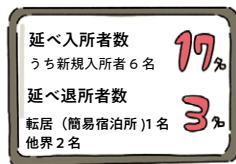
活動
報告

山友荘

5

山友荘は、元ホームレスの方などで、介護が必要であったり、病気や障害のため一人で暮らすことが難しくなった方のための生活支援施設です。スタッフが常駐し、生活の見守りを行うほか、食事の提供や医療機関・介護事業所などと連携した支援を行うことで、入居者の暮らしを支えています。

▼ 2025 年度 山友荘 活動実績



久しぶりだったけど覚えてくれた！



黙々とおそうじ中



退院するの、待ってるよ！



みんなのことをさりげなく気にかけてくれる方でした



2025年度にお別れた、2名の入居者さん

山友会
おじさん語録

朝の9時半から病院で、待ち時間が長くて、だいぶ時間が経ったなあと思ったけど、まだ11時だった。俺はもう昼だと思ったよ。腹時計は12時だったからな。

1 年を
振り返って

昨年度は、新たに6名の方が山友荘に入居されました。これまではドヤや病院からの入所が多かったのですが、昨年度はアパートや区外の生活保護法上の更生施設からの転居が中心となり、山谷での暮らしになじみのない方も増えています。年齢も生活上のニーズもこれまで以上に多様になってきました。

アパートから転居された方で認知症のある方は環境変化が大きいと混乱しやすく、山友荘が「自分の住まい」と感じてもらえるまで時間がかかることがあります。そのため入居直後は特に、おひとりで過ごす時間が長くないよう、スタッフはこまめに声をかけるようにしています。

昨年度は、2名の方とのお別れがありました。おひとは開設当初から暮らしてきた方で、ニコツとした笑顔はとても愛嬌があり、みんなから慕われていました。食事の時間や何か用のある時に、部屋から聞こえてくる伸びやかな「おー———い」という声は、今でもふと聞こえてくるような気がします。

もうおひとりも長く過ごされた方で、他の入居者の方のことをさりげなく気にかけてくださり、「ありがとう」「ごちそうさま」という言葉を丁寧に伝えてくださる方でした。競馬が大好きで、亡くなる2か月ほど前まで場外馬券場に自分の

足で通っていました。負けた日には肩を落としながら、その日の競馬の振り返りを熱心に話してくれました。少しはにかんだ表情で話す姿も印象的で、どこか親しみを感じさせる方でした。

火葬には、スタッフだけでなく、他の入居者さんやケアマネージャー、ヘルパーさん、訪問看護師の方々も立ち会ってくださり、それぞれがここで築いてきた関係の深さを改めて感じる時間となりました。皆に見送られたことを、お二人はきっと喜んでくれていたのではないかと思います。関わった方々が思い出を語り合う姿は印象的で、ここで暮らす方にとっても、自分も同じように大切にしてもらえると感じることに繋がっていると思います。

火葬の後はお二人とも山友会の共同墓地に納められ、今もすぐそばにるように感じられます。そして、このように活動報告書にて報告させていただくことも、お二人がここで過ごされていたことの証になっていると感じています。

山友荘には今後さらに多様な背景を持つ方々が入居されていくと思います。ときにすれ違いがあっても、入居者の方同士が仲間として思い合いながら暮らせる場所であり続けることを、これからも大切にしていきます。

(山友荘 風間)

活動
報告居場所・生きがいづくり
プロジェクト

ホームレス状態にある方や地域で暮らす元ホームレスの方などが、地域の中で孤立せずに自分の存在を認められる居場所と、自身の生きがいとなるような社会的な役割を手にすることを目的に、そうした方々が主体的かつ持続的に参加できる居場所づくりや生きがいづくりをサポートしています。

▼ 2025 年度 居場所・生きがいづくりプロジェクト 活動実績



山友会
おじさん語録

ー今日は元気がいいですね。
「まだふところが暖かいからね」

1 年を
振り返って

プロジェクトメンバーのおじさん達、山谷地域を中心に居住支援・生活支援などを行う「NPO 法人自立支援センターふるさとの会（以下、ふるさとの会）」の利用者さんが集まり、互いの近況や町の変化等について情報交換する「生きがいづくりミーティング」、メンバーが運営する「折り紙の会」をほぼ月に1回ずつ実施しています。恒例となったトントン相撲大会、餃子を食べながら映画を観る会、クリスマス会、お花見散歩といったレクリエーションも継続して開催しています。2025年度は、メンバーがそれらに前のめりで参加する、積極的な年になりました。

●高まる関心、他事業所の利用者も巻き込んで

2025年度も「まちづくりについて考えるミーティング」を開催しました。この企画は、数年間おじさん達が考えて実現したもので、おじさん達が山谷で暮らす住民の一人として、山谷地域にお住まい・お勤めの方々との対話を通じて互いに理解を深める内容です。山友会に通うおじさん達だけでなく、ふるさとの会の利用者さんも参加し、山谷に関わるみんなでこの町のこれからを見つめています。

第4回のゲストは、山谷の町で40年にわたって「まりや食堂」を運営し続けている牧師の菊地

さんでした。菊地さんは宣教をきっかけに山谷で日雇い労働者として働きながら、みんなが安く腹いっぱい食べられるようにと、まりや食堂を始められました。参加者からは成り立ちや山谷の今昔について多くの質問が出て、交流を深めました。ミーティングへの関心は徐々に高まり、次に誰にどんな質問をしてみたいかを考える時間も生まれています。ふるさとの会の利用者さんも「次のミーティングはいつ？」と身を乗り出して聞いてくれるようになりました。

●ミーティングを自分たちで進めるようになったメンバー

月に1度の生きがいづくりミーティングやお花見散歩等のレクリエーションをどのように進めるかについて、これまでは担当スタッフが参加者の意見を引き出すよう働きかけながら、メンバーの意思を形にしてきました。現在も同様に進めていますが、メンバーはある頃から時折、進行を主導していくことがありました。従来、自分たちで考えたり決めたりすることについてはスタッフが支えながら手助けをしてきましたが、自分たちで進めることはメンバーの自信につながります。メンバーの皆さんはそれに気づいているのだと感じました。

(居場所・生きがいづくりプロジェクト 伊藤)



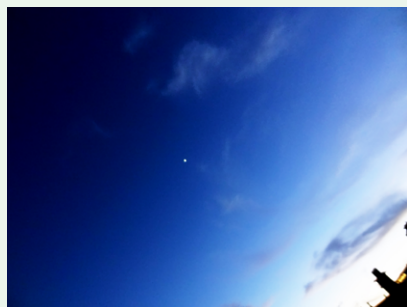
金賞 / KURAKI



金賞



銀賞 / HIROYOSHI



写真の力が宿っているで賞 / MARUCHAN



銅賞 / MASA HARU



素晴らしい構図で賞 / KOJI



大切なものたちで賞 / TERUO さん最後の作品



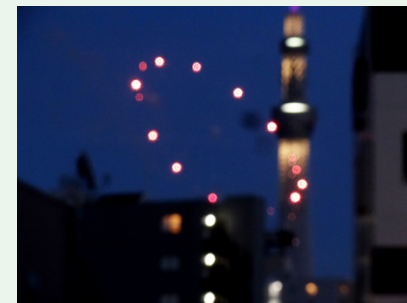
山友会賞 / MISA O



ルポ・ジャン賞 / HIDEAKI



理事長賞 / DAIMON



幻想的で賞 / TOKIO

1 年を 振り返って

昨年、大切な仲間が旅立ちました。山友荘に暮らしていた Teruo さん。いつもカメラを肌身離さず、写真を撮ることが大好きな方でした。言葉でのコミュニケーションが難しい方で、写真で思いを伝えようとしていたのかもしれません。

自分の指が写り込んだ衝撃的な写真、同じ画角で数十枚連写した写真など、常識を超えた作品はプロの芸術家からも支持され、多くのファンがいました。この取り組みの目的である「身の回りを記録すること」「表現を楽しむこと」「写真でつながること」を体現していたメンバーでした。Teruo さんの写真は見た人の記憶に残り続け、語り継がれていくでしょう。

2025 年度は、6 月に六義園、9 月に国立西洋美術館、2026 年 3 月に山谷掘公園から隅田川沿いを歩くイベント「お花見散歩（居場所・生き

がいづくりプロジェクトと共同開催）」など、計 3 回の撮影会を実施、また、12 月には 5 回目となる「フォトコンテスト 2025」を開催するなど、積極的に活動した 1 年となりました。

一方で、体力や健康に不安を抱え、イベントへの参加が難しくなってきたメンバーもいます。それぞれが無理なく、その人らしく活動が続けていけるような環境づくりを心掛けていければと思っています。

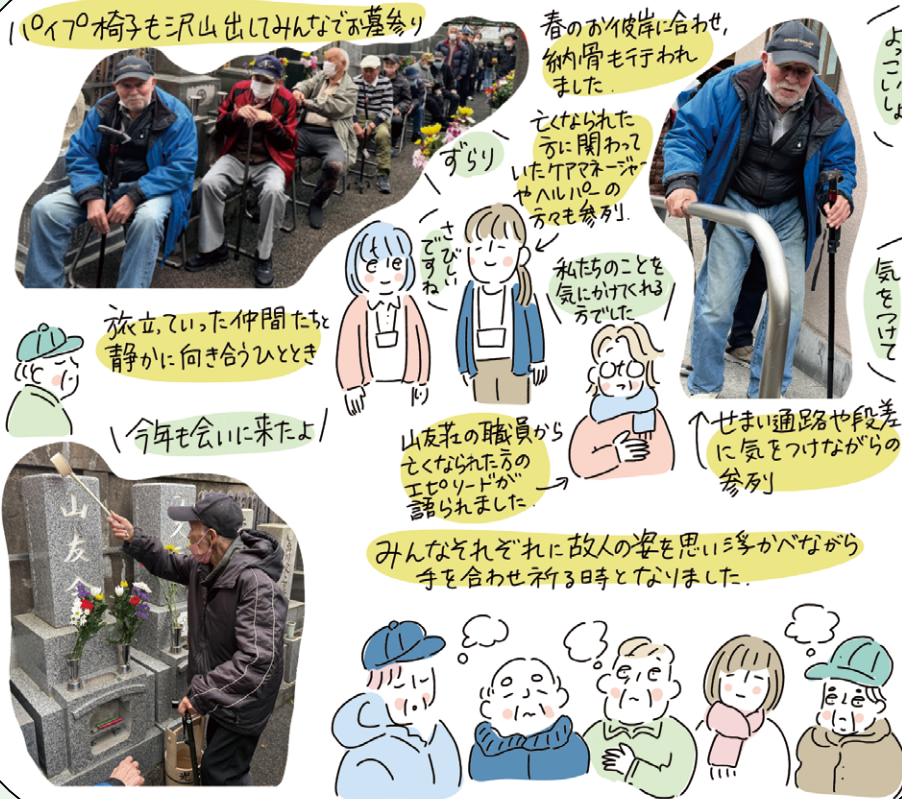
写真を通じてお互いの存在を認め合い、共に生きていくこと。これからも楽しみながら写真を撮ってほしいと願っています。

(山谷・アート・プロジェクト 後藤・高木)

フォトコンテストの作品や写真部のメンバーが撮影した写真は、こちらからご覧ください。



「死後もつながりを感じていられるように」という想いのもと、活動を通してつながりをもった、ホームレス状態にある方で無縁仏となってしまう方のための共同墓地を運営しています。2025 年度末までに 42 名の方のご遺骨が納められました。

山友会
おじさん語録

おじさんA「炊き出しのボランティアさんにお礼しないといけないよ。ご馳走するとか」
おじさんB「おにぎり作ってるときに食べてもらいながらやるのか？」
おじさんC「それはいい！」 - それでいいんですか？笑



蓮を縁として

昨今、浅草山谷地域も再開発が進み、マンションが続々と建設されています。同時に、若い移住者が増えたことで、新たな会社やお店もでき、少しずつにぎやかになってきました。でも、古くからこの街に暮らす高齢者や、簡易宿泊所に住む方の中には、あいさつをすることもない隣人が一度に大勢増えたことで、不安を覚える人もいるようです。もちろん、新旧の住人が個々の生活を優先させることは当然のことです。しかしながら、何もきっかけがなければ不干涉や無関心が続いてしまう場合もあります。

一方、個人のあり方に興味や関心を覚え、声をかけ合うようになり、やがて親しくなっていく場合があります。しかし、ただ毎日顔を合わせるだけで、いきなり見知らぬ人に声をかける方は少ないでしょう。そこで大事なのが、共通の気になる存在を持つことです。道に美しい花が咲けば、その花を縁として会話が自然と生まれてきます。

今年3月、山友会のおじさんたちと一緒にお寺の庭で蓮を育てはじめました。まずは3鉢、みんなで成長を見守ります。花が咲いたなら、見にいたり写真を撮ったりして楽しみ、来年3月には株分けをして、おじさんたちの好きな場所に置いて育ててもらいます。きっと数年後には、浅草山谷の街中に、たくさんの蓮と会話の花が咲くに違いありません。



(光照院 住職 吉水岳彦)

活動
報告普及推進
・社会的包摂
啓発活動
の取り組み

ホームレス問題や山谷地域で起きている社会的孤立を背景にした問題を根本的に解決していくためには、多くの方々のご協力が欠かせません。ホームレス問題や山谷地域の現状、そして山友会の取り組みについての情報を発信し、問題解決に向けた参加を促すために様々なイベントや講演活動、マスメディア等の取材への対応を行っています。

【オンライン活動説明会のご案内】

オンライン活動説明会では、おもに山谷地域やホームレス問題に関心のある方に、山谷地域の現状や山友会の取り組みについてご説明しています。

また、ご支援いただいている皆さまで、最近の活動の様子を詳しく知りたいという方にもご参加いただいています。



NPO法人 山友会
オンライン活動説明会
NPO法人山友会
副代表：油井 和彦
山谷地域や山友会の活動についてご紹介！

開催概要

- ・開催：原則毎月第3木曜日 19時～20時（オンライン）
- ・内容：山谷地域の状況説明、山友会の活動紹介、質疑応答

オンライン活動説明会の詳細はこちら



開催日程やお申し込み方法の詳細はホームページにてご案内しております。

ご支援いただいている皆さまに活動の近況をお伝えし、つながりを深める場としても大切にしたいと考えております。身近に関心のある方がいらっしゃいましたら、お誘い合わせの上、ぜひご参加いただければ幸いです。

また、現在、定期開催が難しいスタディツアーについては、ご依頼に応じて個別にご案内しています。活動現場を実際に見てみたいという方は、お気軽にお問い合わせください。

寄付やボランティアで活動を支えてくださっている皆さまとのつながりを大切に、これからも皆さまとともに歩んでいければと思っています。

山友会
おじさん語録

「友だちが病気で心配なのか、あいつ元気がなくなっちゃったよね。自分がみんなに心配されてるのね」

【イベント】

4月27日	「りんりんふえす山谷 -sing with your neighbors- vol.12」に運営協力
6月1日	山谷・地域ケア連携をすすめる会 第11回シンポジウム 「地域ケア連携から始まるまちづくりー釜ヶ崎・寿町・山谷の支援とケアの視点ー」に運営協力
11月15日	「カリタス東京 生活困窮者支援フェスタ」に出展

【講演】

4月18日	令和7年度 福祉サービス第三者評価特別研修にて講義 「保護施設及び日常生活支援住居施設に関する法制度と現状を学ぶ」日常生活支援住居施設の現状と課題（副代表 油井）
5月27日	東海大学医学部看護学科 公衆衛生看護学概論にて講義 「社会の変化と地域の健康課題との関連と現状についてー山谷地域の特性と健康問題、看護支援の実態ー」（副代表 油井）
6月28日	日本仏教・看護バハラ学会 第21回年次大会_シンポジウムに登壇 「生きている間も一緒、死んでも一緒ー山友会の取り組みから看取りと死生観を考えるー」（副代表 油井）
7月1日	国立西洋美術館アクセシビリティ・ワーキング・グループ勉強会にて講義 （山谷・アート・プロジェクト 後藤）
7月10日	Soar campus に登壇 「“居場所”をつくる支援とはーホームレス状態にある人の孤立と社会とのつながりを考える」（副代表 油井）
9月3日	株式会社 LIFUL 様 えらんでエール Weeks にて報告 「伴走の支援付きシェルターによるホームレス状態の長期化防止事業」（副代表 油井）
9月8日	神奈川県立相模原城山高等学校 社会福祉基礎にて講義 「ホームレス問題から社会のあり方を考える」（副代表 油井）
1月	東洋大学 社会貢献活動入門にて講義（アーカイブ） 「山谷地域の概況と山友会の活動について」（副代表 油井）

【メディア掲載】

8月1日	読売新聞 『ふるさとルポ・ジャンさん「カナダスコッツタウン 秋色に染まる山 美しく」』
10月12日	朝日新聞 『元路上生活の「おじさん」たち、カメラが救いに 山谷の写真部10年』
12月26日	朝日新聞 『元ホームレスがレンズを向ける日常とは 東京・山谷で写真コン』
1月3日	TBS ラジオ「まとめて!土曜日」内「人権 TODAY」 『福祉の街・山谷で暮らすおじさんたちが撮影した写真コンテスト』
1月21日	毎日新聞「『ホームレス』は減った？ 見えない場所で暮らす「家がない」人たち」 ※後藤広史 理事が立教大学コミュニティ福祉学部教授として取材対応

【助成実績】

宗教法人カトリック中央協議会カリタスジャパン国内援助金

助成金交付決定額：500,000 円

助成事業名：社会的に孤立し生活に困窮した人々への食支援を通じたつながりづくりと福祉・医療支援事業

2025 年 公益財団法人公益推進協会 ダニエル・ブレイク基金

助成金交付決定額：1,000,000 円

助成事業名：生活に困窮した人々の社会的つながりをつくる無料食堂・アウトリーチによる「プッシュ型」食支援

東京都共同募金会・令和7年度共同募金特別支援費（物価高騰下のいのちをつなぐ支え合いキャンペーン）

配分額：生活困窮者支援（医薬品等）費として 300,000 円

第3回「LIFULL HOME'S 基金」

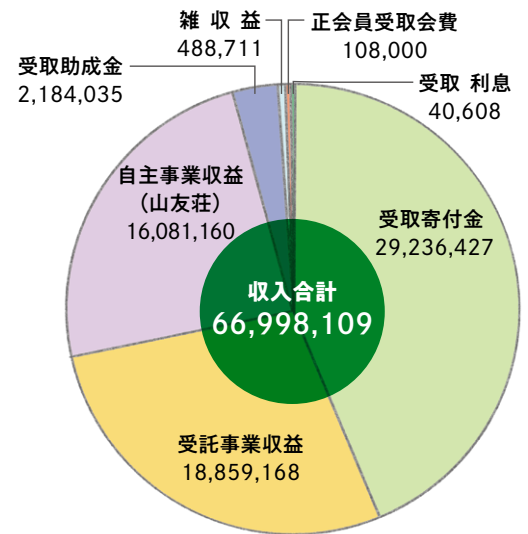
助成金交付決定額：868,000 円

助成事業名：地域の包摂力を育む伴走支援付きシェルター事業

2025年度会計報告

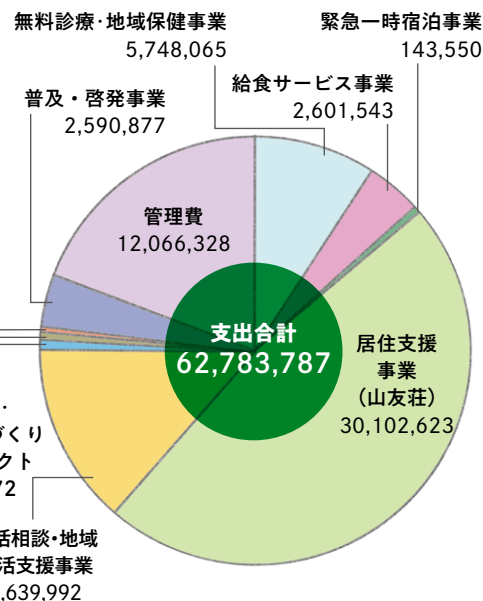
収入の部

項目	金額
受取寄付金	29,236,427
受託事業収益	18,859,168
自主事業収益（山友荘）	16,081,160
受取助成金	2,184,035
雑収益	488,711
正会員受取会費	108,000
受取利息	40,608
合計	66,998,109



支出の部

項目	金額
無料診療・地域保健事業	5,748,065
給食サービス事業	2,601,543
緊急一時宿泊事業	143,550
居住支援事業（山友荘）	30,102,623
生活相談・地域生活支援事業	8,639,992
居場所・生きがいづくりプロジェクト	403,872
山谷・アート・プロジェクト	412,537
共同墓地の維持・管理	74,400
普及・啓発事業	2,590,877
管理費	12,066,328
合計	62,783,787



山友会
おじさん語録

ずいぶん長いこと玄関に座っている山友荘の入居者さんに「何してるんですか？」と聞くと、上を指さしながら一言、「空」。なんだか深い……！

貸借対照表

特定非営利活動法人 山友会

[税込] (単位: 円)
2026年3月31日現在

《資産の部》		《負債の部》	
科目	金額	科目	金額
【流動資産】		【流動負債】	
(現金・預金)		未払金	113,718
現金	108,157	前受金	1,177,375
当座預金	56,024,089	預り金	98,023
ゆうちょ銀行①	(20,382,657)	源泉所得税	(27,023)
ゆうちょ銀行②	(35,641,432)	住民税	(71,000)
普通預金	81,765,671	流動負債合計	1,389,116
みずほ銀行	(1,356,008)	負債合計	1,389,116
ゆうちょ銀行	(70,387,181)		
三菱UFJ銀行	(10,022,482)	《正味財産の部》	
現金・預金計	137,897,917	前期繰越正味財産	150,377,902
流動資産合計	137,897,917	当期正味財産増減額	4,214,320
【固定資産】		正味財産合計	154,592,222
(有形固定資産)			
土地	9,536,629		
建物	5,391,970		
建物付属設備	5		
構築物	1,116,000		
車両運搬具	1		
什器備品	1		
工具器具備品	1,926,185		
有形固定資産計	17,970,791		
(投資その他の資産)			
差入保証金	12,630		
敷金	100,000		
投資その他の資産計	112,630		
固定資産合計	18,083,421		
資産合計	155,981,338	負債及び正味財産合計	155,981,338

監査報告書

特定非営利活動法人 山友会

理事長 大脇 甲哉 様

監査報告書

令和8年5月1日

特定非営利活動法人山友会の2025年度の活動計算書、貸借対照表、財産目録、財務諸表の注記、事業報告書、事業計画書、役員名簿、社員名簿等について監査した結果、正確かつ適正であることを確認いたしましたので、ここに報告申し上げます。

特定非営利活動法人 山友会
監事 河井 通修



ご支援について

支援者からの メッセージ

お湯さえあれば何とかお腹を満たせる自社の製品がお役に立つかもしれないとご提案したところ、思いのほか喜んでいただけたようで、年に数回ではありますが、お届けに上がっています。「経済なき道徳は寝言だ」と言われます。心だけではなく、求められていることのごく一部であっても、今後もできる限り長い期間、お届けできればと思います。奪い合うのではなく、分かち合える「場所」が長く長く続くことをお手伝いしたいと思います。

(喜多野 誠一 様)



山友会クリニックでのボランティア経験を通して、困窮者の方々を愛をもって支えている山友会の姿勢に感銘を受け、支援をしています。山友会に期待することは、生活保護の方が増えている現状を踏まえ、日常生活に安心感を持って暮らせるような医療サポート(鍼灸や筋力のリハビリなどの療法)が増えることです。病気の予防につながるようなサポートができれば、より健康的な生活が期待でき、新たな展開が開けると思います。

(久保田 法子 様)

ご支援いただき、 ありがとうございます

カトリック東京大司教区様、公益財団法人毎日新聞東京社会事業団様、カトリック長崎教区教区評議会様より活動費用のご支援、東京アメリカンクラブ コネクションズ様より食品と日用品のご支援、アガベの家様より食堂用のお野菜のご支援をはじめ、多くの企業・団体、個人の皆さまよりご支援をいただきました。誠にありがとうございました。

山友会
おじさん語録

(お腹を掻きながら)「いやー今日は足が痒くてたまらないよ」
ー足で合ってますよね…?

ご支援のお願い

【マンスリーサポーターに参加する】(毎月の寄付)

クレジットカード決済・口座振替のいずれかをお選びいただけます。
お申込み方法などの詳細は右の QR コードから山友会ホームページ
(<https://sanyukai.or.jp/monthlysupporter>) を
ご覧いただくか、山友会事務局までお問合せください。



【寄付をする】

ーご寄付の方法

- ・郵便振替をご利用の場合

00100-2-158990 加入者名：山友会

※銀行振込をご希望の方は事務局までお問い合わせください。

- ・クレジットカードをご利用の場合

<https://sanyukai.or.jp/donation>

上記 URL より、クレジットカード決済システムを利用してご寄付ください。

右の QR コードからもアクセスいただけます。



※寄付金受領証明書は 1 月 1 日～12 月 31 日までの 1 年間の合計寄付金額を記載し、
翌年 1 月～2 月ごろにお届けいたします。

恐れ入りますが、ご理解の程宜しくお願い申し上げます。

【物品でのご支援をお考えの方へ】

その時に必要なものを山友会のホームページに掲載しておりますので、
そちらをご覧ください。

右の QR コードからもアクセスいただけます。

また、大変お手数ですが、発送前にご連絡いただけますと幸いです。

なお、薬品全般に関しては、市販薬、個人に処方されたものを含め、

受け取ることができませんので、何卒ご了承ください。





NPO
山友会
特定非営利活動法人
SANYUKAI

認定特定非営利活動法人 山友会

〒 111-0022 東京都台東区清川 2-32-8

TEL : 03-3874-1269 FAX : 03-3874-1332

MAIL : info@sanyukai.or.jp

WEB : <https://sanyukai.or.jp>